



TITLE:

久生十蘭作品の研究――〈霧〉と
〈二重性〉のモチーフを中心に(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

開, 信介

CITATION:

開, 信介. 久生十蘭作品の研究――〈霧〉と〈二重性〉のモチーフを中
心に. 京都大学, 2018, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21174>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	開 信介
論文題目	久生十蘭作品の研究——〈霧〉と〈二重性〉のモチーフを中心に		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、近代日本の作家、久生十蘭(ひさおじゅうらん、1902-57)の作品に頻出する〈霧〉のモチーフと〈二重性〉のモチーフについて全作品を詳細かつ網羅的に調査し、その特質を考察した上で、代表作「鶴鍋」「予言」「母子像」に対し、そうしたモチーフとの関わりを縦糸とし、各作品独自の分析を横糸として論じたものである。</p> <p>久生十蘭の経歴、文学的特徴、これまでの研究動向それぞれを概観し、本論文の目的と構成を記した「はじめに」に続き、第一章では久生十蘭の全268作品における〈霧〉モチーフが分析される。すなわち、「霧」の描写を含む作品163、うち〈霧〉モチーフが認められるものは110に及ぶ。これらを4つの指標、すなわち「指標の〈霧〉」、「契機の〈霧〉」、「暗示・予兆の〈霧〉」、「非日常の〈霧〉」に分類した上で、それぞれの作例が分析され、〈霧〉モチーフの集成として長篇「氷の園」が詳細に考察される。次に、〈霧〉モチーフ成立の背景として、①日本の風景論や文学に頻出する霧の表現、②故郷函館周辺や留学先パリでの印象深い霧の記憶、③泉鏡花、芥川龍之介、エドガー・アラン・ポー、「シラノ・ド・ベルジュラック」など愛読作品の影響が挙げられ、特に「シラノ・ド・ベルジュラック」の重要性が指摘される。最後に、全268作品における「霧」の描写・〈霧〉モチーフの有無とその登場箇所、指標の種類が一覧表として提示される。</p> <p>第二章でも、〈二重性〉モチーフの定義を経て、これが全作品中126作品に見られることが示される。これらは4つの範疇、すなわち、I「作為による〈二重性〉」、II「無作為・偶然による〈二重性〉」、III「夢・狂気・超自然力による〈二重性〉」、IV「所属・空間構造による〈二重性〉」に大別され、さらにその細目として27に区分された後、詳細に分析される。その上で、〈二重性〉モチーフとは人格や事物等の同一性・一貫性を攪乱するものであり、その不定形さや流動性は〈霧〉モチーフとも共通し、創作において根源的なものであったと総括される。また、上記I、II、IVを近代合理、IIIを超自然と見れば、その7対1という数的比率は作家の理知的傾向を、またIとIIの3対1という比率は偶然性より人為的因果を重視する傾向をそれぞれ示すこと、特に、Iのほとんどを占める入れ替わり・変装・偽装は探偵小説の影響と見なされることが指摘される。次に、〈二重性〉モチーフ成立の背景として、映画『ジゴマ』や最初期の翻案・翻訳、「シラノ・ド・ベルジュラック」など種々の可能性が示される。最後に、〈二重性〉モチーフの諸相が看取される長篇「魔都」、〈霧〉モチーフと〈二重性〉モチーフの緊密な対応が看取される短篇「雲の小径」が考察される。なお、前章に倣い、両モチーフの有無とその登場箇所、範疇・細目が一覧化される。</p> <p>第三章では、「鶴鍋」(のち「西林図」と改題)の背景となった横浜大空襲による滋子の失踪について、旧民法等を参照しつつその法的正当性が検証された後、主人公の参亭と滋子の結婚が、敗戦後の家制度の解体と密接に関わることが論証される。次いで、登場人物たちが一貫して滋子を目前の真鶴、さらには死者と見立てる点について、〈二重性〉モチーフの観点から分析され、初期の「新版八犬伝」からの影響が指摘される。その上で、「新版八犬伝」での白鷺を真鶴に変えたのは滋子と参亭の結婚を寿ぐため、また食用の鳥という設定上の必要からと考察される。さらに、丹頂鶴ではなく真鶴とした理由について、後者の灰色がかった体色が霧の灰色と重なり、白と黒の混合という点で二重性も帯びていることが指摘される。これによって、死者に見立てられた滋子は〈霧〉と〈二重性〉のモチーフの融合した存在と結論される。</p>			

「予言」を論じた第四章では、ジェラルド・ジュネットの語り論を援用し、語りの二重性が論じられる。「われわれ」という語り手の一人称が2回しか示されない本作では、語り手不在の場面でも主人公安部の内面が語られるため読者は混乱するが、末尾にいたって、安部が死の間際に語り手に語った内容に拠ると判明する。こうした語りの構造は、半透明化した語り手によって最後まで隠蔽されるため、本作は三人称小説に擬態した一人称小説であると考察される。次に、安部の体験が事実であるかのように語られ、最後に催眠術だったとわかる「幻覚小説」(いわゆる夢オチ)の形式を取った理由について、三人称小説に擬態した一人称小説という形式面、催眠術による時空の取り違いという内容面、それぞれの〈二重性〉を対応させるためであり、さらには安部が催眠術を掛けられる場面に見られる〈霧〉モチーフとも照応することが論じられる。

第五章では、世界短編小説コンクール(ニューヨークのヘラルド・トリビューン紙主催)で一等を得た「母子像」について、まず主人公太郎の「変装・偽装」「時空の意図的な取り違い」という〈二重性〉、太郎の母の「生死を取り違える」という〈二重性〉、太郎の崇拝する母が戦後売春する二面性、また太郎の行動の意図を大人たちがいちいち誤解していく構造的〈二重性〉が指摘される。次に、アジア太平洋戦争末期のサイパン島玉砕とその後の母子の苦難を扱った本作は、アメリカのマッカーシズムへの政治的配慮から、同コンクールに応募した際、吉田健一の英訳において関係箇所削除が行われたのではないかと、という先行説の当否が検討される。同コンクール成立の背景や「母子像」英訳文が詳細に調査された結果、確かに削除箇所はあるものの、文意に異同は無く、政治的配慮の痕跡も認められないと結論される。さらに、原文をなるべく簡明な言葉で伝えるという吉田健一の翻訳観が紹介され、本作とともに同コンクールに応募された他二作品でも省略があり、そこでも政治的影響は見られないことが具体的に示され、先行説が正される。

終章では、久生十蘭の作風に即して、〈霧〉〈二重性〉モチーフを自在に組み合わせ、多様な効果を生み出す点にその小説技巧があったと結論される。

(論文審査の結果の要旨)

久生十蘭(1902-57)は長らく不遇の作家であった。一部具眼の士からは高く評価されていたものの、巧緻を極めた文体や構成が容易に一般読者を寄せ付けなかったためか、7巻本の全集(三一書房)が刊行されたのは没後12年を経た1969-70年であり、それも夢野久作・小栗虫太郎ら「異端文学」ブームに乗じたものであった。没後50年を経た2008年になって、ようやく12巻から成る文字通りの「全集」(国書刊行会)が刊行され(一2013)、以後、徐々に研究が活発化している状況である。

本学位申請論文は、こうした近來の動きに呼応しているが、その精髓は、第一に、従来の作家論や評論とは異なり、全268作品を網羅的に調査して久生十蘭文学の根底をなすモチーフを綿密に区分・分析した点にある。すなわち、先行文献で一部言及された雲霧の描写や、演技・変身・憑依といった「二重性」という特徴に関して、それぞれ〈霧〉モチーフ、〈二重性〉モチーフとまとめた上で全作品を調査し、詳細な一覧表として示した点は、本論文の中核を成す優れた成果である。〈霧〉モチーフを扱った第一章では、4つの指標それぞれの作例分析のみならず、複数の指標の同時使用例まで周到に目配りされており、異世界への参入や異常な事件の契機・予兆として、〈霧〉モチーフが作者の偏愛するものだったことを明らかにしている。

続く第二章でも、〈二重性〉モチーフの諸相が4つの範疇、27の細目として整理され、探偵小説出身の久生十蘭が理知的、人為的因果を好む一方、幻想小説作家として超自然性への傾斜も認められることを数値化した点は高く評価できる。また、そうしたモチーフを好むようになった背景として、第一章同様、作家の個人的経験や同時代の文学・映画などへも周到に目配りされており、説得性に富む。

ただし、こうした分類は作品解釈に依存するため、若干の異論も生じ得る。例えば「黄泉から」末尾は、死んだ従妹おけいの導きにより千代が尋ねてきたという解釈からIII-⑧超自然の顕現の例とされるが、単なる偶然の訪問との可能性も残されており、むしろこうした一義的解釈を拒む点に近代文学としての特質を見るべきであろう。しかし、全体の傾向分析は十分説得的であり、従来の研究を大きく進展させたものであることは疑いようが無い。じっさい、以上二つの章の初出論文は、斯界の専門誌(京都大学『国語国文』、岩波書店『文学』)に投稿、掲載された。

第三章以下は、久生十蘭の代表作三作について、〈霧〉〈二重性〉モチーフとの関わりを縦系とし、各作品独自の分析を横系として論じられる。この精緻な作品分析が本論文の精髓の第二である。

まず第三章「鶴鍋」(「西林図」)論では、旧民法を中心とした同時代の法的・社会的状況、および食用の鳥としての鶴が追究される。すなわち、戦後の1946年秋という作中の時代が、日本国憲法施行前で旧民法の適用下にあったことから、女主人公滋子の死亡認定条件や、祖父鹿島老人の戸主としての存在に瑕疵があり得ること、しかし逆に、敗戦による家制度の解体もまた進みつつあったことが、同時代資料により明らかにされ、秀抜な論となっている。続いて、横浜大空襲後に失踪した滋子を、鹿島老人が死者・真鶴と見立てた意味に関連し、初期の「新版八犬伝」では白鷺とされたのを真鶴に変えた理由について、〈二重性〉モチーフと関連づけた点も興味深い。当時の東京に丹頂鶴や真鶴が飛来する可能性や、食用の鳥としての鶴に関する考察とも相俟って、厚みのある論述となっており、説得力を持つ。

続く第四章「予言」論では、読み進める者を混乱させる本作独特の語り方について、具体的に文章を追いながら考察を加え、綿密に分析した点が高く評価できる。また、三人称小説に見せかけた一人称小説であり、かつ催眠術による時空の取り違えが見られる点で、形式・内容両面に渉る〈二重性〉が意図されているのではないかとし

た点は、刺激的な読みの可能性を示している。

最後の第五章では、世界短編小説コンクール受賞作「母子像」について、太郎やその母に見られる種々の〈二重性〉を探った後、吉田健一による英訳における削除がマッカーシズムへの政治的配慮ゆえだったと示唆する先行説が正されるが、これには異論の余地が無い。すなわち、削除前後で文意の異同が無いこと、当時の吉田健一の翻訳観が簡明を旨としていたこと、他の英訳作品でも文意に変更の無い大きな削除箇所があることは、本作の部分的削除が政治的配慮と無関係だったことを端的に示している。

以上、久生十蘭の全作品を対象とした煩を厭わぬ調査と分析、緻密で飽くなき考察は、久生十蘭研究に多くの新見をもたらしたといえる。もっとも、取り上げられた作品は少数であり、作品解釈に異論を残す部分も皆無とはいえない。しかし、特に〈二重性〉という概念は、作品解釈の多様性とも関わって今後の研究において汎用性が高く、確固たる拠り所になると推察される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版慣行上の支障が無くなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降